

十五年戦争下、反ファシズムと

デモクラシーの確立を訴えて

言論統制とそれに萎縮したマスコミを

痛烈に批判した、幻の

反体制メディア評論紙、復刻！

# 現代新聞批判

一九三三（昭和八）年一月～四二年三月

全七巻・別冊一

本体単価＝一四〇、〇〇〇円

太田梶太＝主宰

門奈直樹＝監修

丕出版

# 反ファシズムの連帯を明らかにする資料

荒瀬 豊

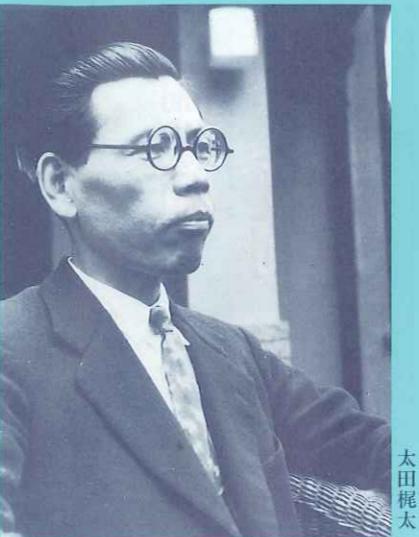
批判という語は、第一次大戦から一九三〇年代にかけて、ことのほか厳しく根源的な要素を意味していた。I・カントの主著三部作『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』が紹介検討され、かたやK・マルクスからも『経済学批判』や『資本論』の本格紹介を通じて古典派の政治経済学批判が新しい学問実践の支柱だと教えられた。日本の思想家に例をとれば、長谷川如是閑の主著『現代国家批判』『現代社会批判』は二十世紀の政治社会構造をその根底から明らかにしようとする体系的な試論であった。

長谷川は『大阪朝日新聞』社会部長の席を追われて個人雑誌『我等』（のち『批判』と解題）を拠点としたのだが、おなじ『大阪朝日』でより若い入脈をもった太田梶太の『現代新聞批判』にも、眼前の事実を系統づけて本質的な解明に迫る強靭なバネの持続がたくましい。しかも、太田が従事していた整理部という職域は、あらゆる分野の記事の正誤軽重をみきわめて紙面に配置するかなめの部署だつただけに、『現代新聞批判』の内容は、国際政治から風俗、芸能などにまで及んでいる。

寄稿の顔ぶれも、たとえば日本放送協会（のちNHK）の報道や文芸の基本路線を敷いた成沢玲川や、ノーベル賞受賞の平和思想家ノーマン・エンジエルなど、三十年代のだいじな思想家に富んでいる。反ファシズムの連帯を考えるうえで、確實で有力な資料が、門奈直樹氏の尽力により世にのみがえた嬉しさは、たとえる言葉もない。

（日本女子大学教授）

## 戦時下思想的抵抗の新発見



太田梶太

十五年戦争下、マスコミが時勢に追随して、というよりもむしろ軍国主義の風潮を作りあげる先頭に立つて、ることは、戦時下のパックナンバーを通して明白である。そのようななかでの『福岡日日』の菊竹淳、『信濃毎日』の桐生悠々のように、時勢を批判する筆陣を張った記者があつたが、権力の統制下におかれていった新聞がその姿勢を貫くことは不可能で、抵抗は短期間で終つた。

菊竹・桐生は主筆として当該新聞を拠点としての抵抗であつたが、マスコミ内部の体験に基づき、マスコミの内部告発にちかい形で間接に時流を批判しようとしたのが、この『現代新聞批判』であった。戦後の小和田次郎の『デスク日記』や今日なお続いている『マスコミ市民』の類の戦中版と見てよからう。しかも、言論検閲制のない戦後と異なり、戦後世代に想像もつかないであろう苛烈な言論統制下のこのミニコミ紙の意義は、比較にならないほど高いものがある。

戦時下の思想的抵抗の試みをつとめて収集してきたにもかかわらず、本紙の存在を知らなかつたのはお恥ずかしい次第であるが、その存在が発掘され復刻されるにいたつたのは、私個人にとどまらず、学界のためにもよろこびにたえない。私自身その全体をはじめて通読できるのを、今からたのしみにしている。

（東京教育大学名誉教授）

家永三郎



住谷悦治

## 貴重な情報を満載した 抵抗のジャーナリズム

尾崎秀樹

『現代新聞批判』は『大阪朝日新聞』出身の太田梶太が一九三三年から四三年にかけて一〇年刊行したマスコミ批判の半月刊紙である。へ創刊の辞にもあるように、「現代新聞批判は時代のジャーナリズムに厳正なる批判を加え、その純化と向上を図るために創刊された」のであり、よりマス・コミ化し、時代の趨勢に迎合していくた新聞に対し、痛烈な批判をあげている。しかも当時の新聞報道では、うかがい知れなかつた各種の情報もあり、貴重な資料ともなつていて。例えば『大阪毎日新聞』の城戸元亮会長敗退の真相とか、『大毎』夕刊に連載され話題を呼んでいた林不忘の「丹下左膳」が突如中止となつた事情、カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルグの墓がナチスに荒らされたというベルリンからの住谷悦治の記事、ヒトラーと単独会見した大特派員・黒田礼二の裏の事情、二・二六事件後の新聞反動化の危機、朝日を退社し内閣嘱託となつた尾崎秀実の転身の動機や心境を語る私信など、興味ある資料を提供してくれる。発行部数は五〇〇部に過ぎなかつたとはい、体制に抵抗した数少ないジャーナリズムだ。

（文芸評論家）

## 『現代新聞批判』の復刻をよろこぶ

久野 収

言論、表現の自由は、国家と社会の健康度、良識の高低、強弱を計るパロメーターである。言論、表現の自由に鈍感な国家と社会、言論、表現の自由を指導し、統制できると信じこむ国家と社会は、確実に亡びの門をくぐつているのである。

一九三〇年代の日本は、政府も市民も、この明白な道理をはなから軽視していた。政府と官僚の方は、国論の戦争遂行への強制的方向づけに全力をつくし、そのため言論、表現の取締り、抑圧に熱心であった。市民の方も、国論は上から決められるのが一番いいのだと信じ、少しの疑念も持たなかつた。

国論は、自由な言論とその表現にある討論を通じて形成さるべきだと信じたのは、ほんの一握の言論人と知識人たちにすぎなかつた。その人々は、関西では『現代新聞批判』『世界文化』『土曜日』に拠つて、亡びの門をくぐる国家と社会に待つたをかけた。しかし政府と国論は、この試みを締め殺して、亡びの門を通つていった。『現代新聞批判』の戦後五十年たつての復刻は、だれが正しく、だれがデータラメであつたかを明らかにしている。戦後の読者諸君の一読を心から期待したい。

（評論家）

(回二月每)  
號八十五第  
(行發日五十·日一)

# 現代新聞批評

**THE PEN  
IS MIGHTIER THAN  
THE SWORD**

この意味において當面の事件の一段落によつて樹立された緊張と恐怖から解放された新聞が示した態度は、正衛公からお鉢が廣田氏に渡され組閣とまぎれもつと安心して氣がゆるることは無理がないとはへ、大局の見透しがつかず時局の眞實の重大性に對する認識を缺いたものであつたことは辯解の余地があるまい。朝日新聞の如きは是もこの傾向を極端に示したものであつた。勿論それはかゝるファッショニスト的な動機に反対しこれを抑へんとする自由主義的意向のもとに意識的に行はれた點も多少あったと思はれるが、現段階の時局の重大性に對する左派の分を認識を缺いてゐた所よりは免れ得ないと思はれる。

由來朝日新聞社あたりは相當物事を深いところから見ら判斷し得る人物を集めてゐる筈であるが、さて紙面に現はれる段どりとなると現はれる段どりとなると必ず社会部、政治部あたりの記者がそこらを駆けめぐらはつて取材をかき集めたままの主脳者は相當な経験者ではあるが、それらは過去の時代、自由主義華かなりしてゐる。これを総合的に判断して、決定するこれらの部の主脳者は相当な経験者ではあるが、それは過去の時代、時代の至極氣樂な経験を土台としたものであつて、その如き複雑困難な時代に對してはこれらとの経験は時として役に立たないのみかかへつて有害なものとなる場合があるのである。

方新聞は強力な外部からの影響を受けて云々と正面書きつて云はずに、思はせぶりに皮肉や、反語を以て語らうとする。それは當然に物事の中核を衝くことが無く、ごく些末なものについての、末梢的なものについて語る結果となつてゐるのである。この態度は一部神經的なインテリ層の一時的満足を與へるに決して廣汎な層に於へるところはないのである。直接の結果といへば軍部やファッジストをいらだたせ、反省を促さずしてかへつて恨を買ふのみである。

社會の問題に近頃する必要ある。心が生じてゐる。心や、犯罪の事件の興味の追求や、氣の利いた文章や見出しのつけ方だけに苦心してゐねばい、時代ではないくなつて來てゐることは確かである。

下村氏の後姿は淋しいものである。資本主義機構の中において資本に根を置かずして、時事一紙、敢然として新聞小言  
内閣聲明の虚を衝く。  
曰く「國民の最も要ふる  
は諸軍の一事がである。  
この點に一言も觸れぬ聲明により安堵し得るか』  
民意を代辯してくれる新聞の見當らない今日。  
これだけの發言にすら吾らは暗夜に一燈の思ひ。

ても充分うかゞへるところである。  
ゆるふん的、消極的な廣田首相のものと出來上つた内閣がファッショニズムでは強化して行けるものではない、一先づ安心である、政黨員も官僚も加はつた位である。心配したが、それ程でもなかつたといふ安心は果して事態を正確に把握したものであつたらうか。戒厳令下に作られた内閣の意味は決してそこに並べられた判断の粗觸れなどによつて判断せらるべき性質ものでないことはいふ点もなつである。

報道統一を提議す。	×	既に何物かに統制されてゐる我國の通信報道。	×	これ以上は統制の餘地がないのでお生憎さま。	×	頼母木選相、新聞通信の自動化の危機について注意を起らんとする朝日新聞の反対するものではない。
下村氏退社を機縁として運動化の危機について注意を起らんとする朝日新聞の反対するものではない。	×	頼母木選相、新聞通信の自動化の危機について注意を起らんとする朝日新聞の反対するものではない。	×	これ以上は統制の餘地がないのでお生憎さま。	×	頼母木選相、新聞通信の自動化の危機について注意を起らんとする朝日新聞の反対するものではない。
一方的報道を強ひるは國民を愚にするも甚し。	×	非常時局なればこそ報道の自由が必要なのだ。	×	何物にも屈せぬ果敢なる論争が必要なのだ。	×	一方的報道を強ひるは國民を愚にするも甚し。
僞報の上に築かれたる愛	×	何物にも屈せぬ果敢なる論争が必要なのだ。	×	非常時局なればこそ報道の自由が必要なのだ。	×	一方的報道を強ひるは國民を愚にするも甚し。

る。氏が永年東京に在つて政界方面との折衝に當つた功績は認めらるべく、かつ今次の事件中も東京朝日新聞の中心人物として連日活動したこととは特筆さるべきであらう。

# 次日号

資本家圓のかくの如き代議院者として迎へられたのである。つた。

もとより下村氏の系統に属するものは舊來の大阪系、商系、編輯部門に於ける市京帝大系のものに比して、多少官僚的、學問的であると云ひ得るのである。

(營業部門における神戸亮一) 編輯、營業の陣容の上に直接の變動があらうとは思はれない。しかししながらおはるの部門で最も重役位にはおはるの空氣はいちぢるしき變化があるものと期待される。

この社における重役陣中では僅に(三)の眞の意味における知識分子を數へるのみである。これらがいはゆる「自由主義」朝日の中高幹部であつたのである。

曲・山田三良博士	(六)
下村閥	(七)
自由主義	(八)
草鞋	(八)
と新聞の功過	(八)
の責任	(九)
リード	(九)
國産赤玉	(十)
マンソンチャエル	(十一)
批評に進出せよ	(十二)
6	(十三)

次日號日一月四

新内閣の新政綱と新聞  
新内閣と東京各紙論評  
不可解な蘇峰の言  
朝日上野内閣愈よ安泰  
春宵東朝記者問答

## 新聞反動化の危機 ドイツ新聞の没落

## 復刻にあたつて

本紙は、『大阪朝日新聞』出身のジャーナリスト・太田梶太が、十五年戦争のさなか、一九三三年に創刊したメディア批判のメディアである。

太田は、『大阪朝日新聞』在職中、「満州事変」以後のマスメディアの状況に危機感を抱いて尾崎秀実・森恭三・鈴木東民らと社内に新聞研究会を組織、会社と対立して退職した経歴を持つジャーナリストである。

本紙の既成ジャーナリズム批判は痛烈で、軍部や言論統制に迎合する新聞のあり方を糾弾し、同時に新聞人への殺傷事件や舌禍事件などを見逃さない。また、新聞界での人脈を駆使して、新聞人批判・人事批判・誤報事件・校正ミスにいたるまで新聞社の内情すら明らかにしながらありとあらゆる新聞メディアに関わる事象に厳しい批評を行なつてい。その対象は、大学新聞から地方新聞そして大新聞まで、幅広い。

本紙には、ジャーナリストだけでなく、嵐寛寿郎・新村出・戸坂潤・小岩井淨・布施辰治・坂本勝など多彩な人々が寄稿している。なかでも出色なのは、同志社を追われた、太田の最大の協力者・住谷悦治による「学者転向物語」「大学教授華想物語」で、戦時下の知識人の思想の脆弱さを擊つている。住谷が欧州から、既成マスコミが決して報じなかつたナチス体制下のドイツのメディア事情を詳しくまた迅速に紹介したことも貴重である。

ファシズムが荒れ狂う時代にジャーナリスト主体の確立と勇気ある連帶を訴えて『世界文化』『土曜日』と同様、戦時下の知識人の思想の脆弱さを擊ついるジャーナリズムのひとつとして、これまで歴史に埋もれていた本紙を復刻するものである。

門奈直樹  
不二出版編集部

## 現代新聞批判 創刊主旨書

現代は新聞の跳梁跋扈する時代である。

大新聞は余りにも商品化し、往々にして自から威を放擲してゐる。中小新聞は只管商品化せんとして、大衆に追随しつゝ反つて大衆に侮られてゐる。

然も、大衆は新聞に對して無力である。ある者は新聞を呪ひてこれぞ闇はず、ある者は新聞に媚びて及ばざらんことをこれ努む。

たゞ、當世に大廣告主あり、嚴として新聞に對峙し、新聞は概ね大廣告主に阿諛して至らざらんことをこれ惧れてゐる。

弱きものよ、汝の名もまた新聞では無かつたか。

然し乍ら更に惟ふ、新聞の當代に躍躍して、國家社會に奉仕盡瘁しつある効果も亦大なるものがある。殊に所謂大新聞が、國家公共の力未だ成し得ざる所に率先着手して、善く文運の興隆普及につゝめ、また國力の充足に資する所あるは、何人も認むるに吝ならざるものである。

下名は多年、所謂大新聞の中に生きてつぶさにその功罪を知り、新聞の如何に商品化し、何故に弱きを求めるに至つたかの、苦衷と内情とに精通してゐるこ、ひそかに自信してゐる者である。

今、ここに、獨力現代新聞批判を創刊する所以のものは、實にこの自信を唯一の據る所として、敢て當代の新聞に尖銳なる批判のメスを加へその賞揚禮讀すべき點を天下眞眼の士に紹介し、而してまたその横暴不當を爬羅剔抉して呪咀する者と共に三斗の溜飲を下げるがためである。

ここに、新聞の人事、經營の當否曲直については知り得る限りの情報を萬集して、永久に紙面に表はれざる病根と情弊とを白日の下に曝露して

ノーリカウセヒトナシノル。

## 他山の石 全四巻・別冊一

### 聖化 全二巻・別冊一

第一回配本(第一~三巻)――一九九五年六月

第二回配本(第四~七巻・別冊)――一九九五年九月

第三回配本(第八~十一巻・別冊)――一九九六年三月

第四回配本(第十二~十五巻・別冊)――一九九六年六月

第五回配本(第十六~十九巻・別冊)――一九九七年三月

第六回配本(第二十~二十三巻・別冊)――一九九七年六月

第七回配本(第二十四~二十七巻・別冊)――一九九八年三月

第八回配本(第二十八~三十巻・別冊)――一九九八年六月

第九回配本(第三十一~三十三巻・別冊)――一九九九年三月

第十回配本(第三十四~三十六巻・別冊)――一九九九年六月

第十一回配本(第三十七~三十九巻・別冊)――一九九九年九月

第十二回配本(第四十~四十二巻・別冊)――一九九九年六月

第十三回配本(第四十三~四十五巻・別冊)――一九九九年三月

第十四回配本(第四十六~四十八巻・別冊)――一九九九年六月

第十五回配本(第四十九~五十巻・別冊)――一九九九年九月

第十六回配本(第五十一~五十二巻・別冊)――一九九九年六月

第十七回配本(第五十三~五十四巻・別冊)――一九九九年九月

第十八回配本(第五十五~五十六巻・別冊)――一九九九年六月

第十九回配本(第五十七~五十八巻・別冊)――一九九九年九月

第二十回配本(第五十九~六十巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(第六十一~六十二巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(第六十三~六十四巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(第六十五~六十六巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(第六十七~六十八巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(第六十九~七十巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(第七十一~七十二巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(第七十三~七十四巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(第七十五~七十六巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(第七十七~七十八巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(第七十九~八十巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(八十一~八十二巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(八十三~八十四巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(八十五~八十六巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(八十七~八十八巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(八十九~九十巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(九十一~九十二巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(九十三~九十四巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(九十五~九十六巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(九十七~九十八巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(九十九~一百巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百一~一百二巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百三~一百四巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百五~一百六巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百七~一百八巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百九~一百十巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百十一~一百二巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百三~一百四巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百五~一百六巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百七~一百八巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百九~一百十巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百十一~一百二巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百三~一百四巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百五~一百六巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百七~一百八巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百九~一百十巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百十一~一百二巻・別冊)――一九九九年九月

第二十五回配本(一百三~一百四巻・別冊)――一九九九年六月

第二十五回配本(一百五~一百六巻・別冊)――一九九九年九月

第二